

32 【国際商学部】

小論文問題

2024(令和6)年度

【注意事項】

- この問題冊子は「小論文」である。
- 試験時間は60分である。
- 試験開始の合図まで、この問題冊子を開いてはいけない。ただし、表紙はあらかじめよく読んでおくこと。
- 試験開始後すぐに、以下の5および6に記載されていることを確認すること。
- この問題冊子の印刷は1ページから3ページまである。
- 解答用紙は問題冊子中央に1枚はさみこんである。
- 問題冊子に落丁、乱丁、印刷不鮮明な箇所等があった場合および解答用紙がない場合は、手をあげて監督者に申し出ること。
- 試験開始後、解答用紙の所定の欄に、受験番号と氏名を記入すること。
(受験番号は2箇所、氏名は1箇所)
- 解答は必ず解答用紙の指定された箇所に記入すること。解答用紙の裏面に記入してはいけない。
- 問題番号に対応した解答欄に解答していない場合は、採点されない場合もあるので注意すること。
- 解答する字数に指定がある場合は、句読点も1字として数えること。英数字を記入する場合は、1字分のマス目に2文字まで記入してよい。
- 問題冊子の中の白紙部分は下書き等に使用してよい。
- 解答用紙を切り離したり、持ち帰ってはいけない。
- 試験終了時刻まで退室を認めない。試験中の気分不快やトイレ等、やむを得ない場合には、手をあげて監督者を呼び、指示に従うこと。
- 試験終了後は問題冊子を持ち帰ること。



[問題] 次の文章を読んで、後の設問に答えなさい。

経済成長、とは誰もが日常的に聞く言葉だと思う。経済成長は世の中の活力にとって大切だ、と議論する人々がいる一方で、経済成長は環境によくないから止めるべきだ、と議論する人々もいる。「政府はどのような成長政策を実施すべきか」のような政策議論も盛んである。しかしながら、経済成長とは何か、と問われるときちんと答えるのは意外と難しい。ここではマクロ経済学の立場から説明を試みたい。

マクロ経済学でいう経済成長とは、時間を通じて国内総生産(GDP)が増えることである。では、GDPとは何かというと、国内で生産される付加価値の総和のことである。では付加価値とは何かというと、企業が財(やサービス)を生産するプロセスで「付け加えた」価値のことである。例えば自動車を造る会社を考えると、売った自動車の価値から部品会社への支払いを差し引いたものが「付加価値」となる。まとめると、経済成長というのは国内で新たにつくり出される総価値の増加である。

では、「価値」とは何か。哲学者に尋ねたら、何冊も本が書けるほどの答えが返ってくるかもしれない。しかしながら、経済学者の答えは簡単で、「価値」とは「価格×数量」のことである。だから、経済成長とは、時間を通じて「価格×数量」の和が増えること、となる。

例として、まず価格が一定のケースを考えよう。人々がリンゴだけを作つて売買し消費する経済があったとする。ここである年に前の年より10個多くリンゴが生産され売買されたなら、GDPは「リンゴの価格×リンゴ10個」分増えるため、この経済は成長した、と自然に結論づけられる。

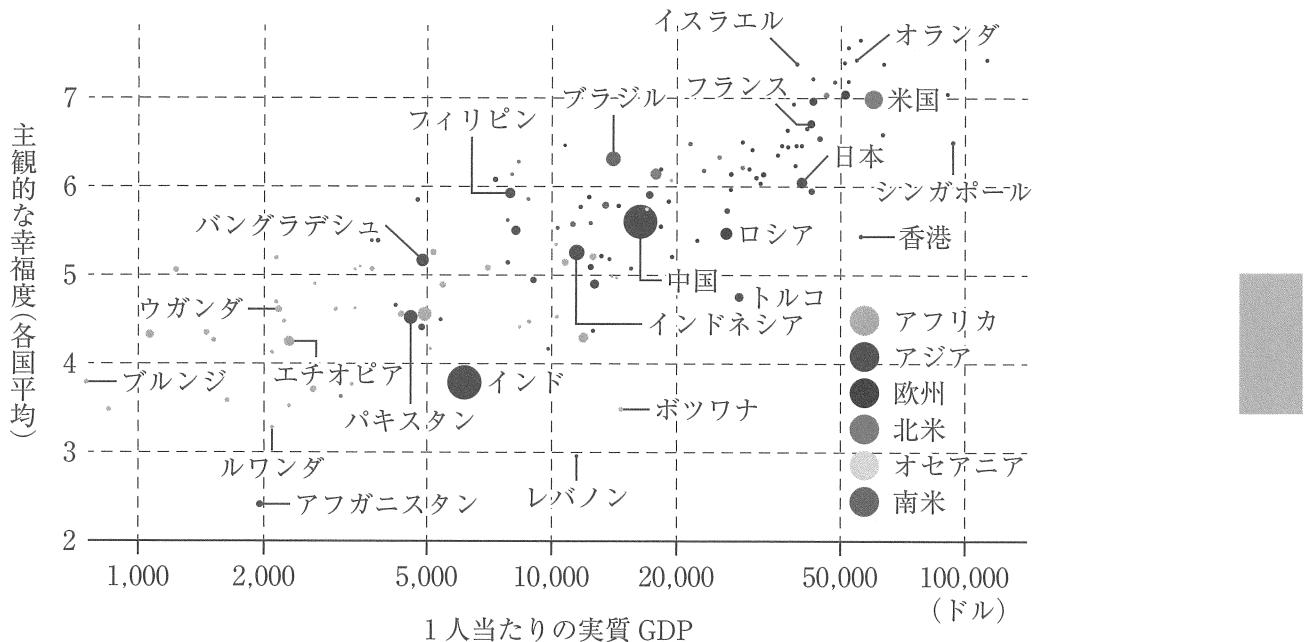
次に、価格が変化する例を考えよう。実は、このケースは一筋縄ではいかない。再びリンゴ経済を考える。ある年と次の年のリンゴの生産量が同じだったとして、最初の年から次の年にかけてリンゴの価格が上がったとき、この経済は成長したというべきだろうか。「価格×数量」を文字どおり捉えるならばGDPは増えている気がするが、マクロ経済学者はもう少し深く考える。その思考を理解するには、「そもそも、なぜGDPを気にするのか」というところから始める必要がある。

マクロ経済学者がGDPを気にするのは、それが幸福度の指標になっていると考えるためである。しかし、前述のように2つの年でリンゴの生産量が変わらないなら、価格がいくらになろうと、幸福度が変わると考えるのは不自然である。そのためマクロ経済学では、GDPを計算する際に財の価格の変化を調整する手続きを行い、調整前のGDPを「名目GDP」、調整後のGDPを「実質GDP」と呼んで区別している。

実際にどのような調整が行われているかを網羅する紙幅はないが、基本的なアイデアは、ある年の価格を基準として用いる、というものである。この手続きをすると、2つ目のリンゴ経済では実質GDPは(数量が同じなため)両年とも同じ値ということになる。

マクロ経済学では実質GDPを最も重要な指標と考える。実際、データを見ると各国の実質GDP(正確には「1人当たりの実質GDP」)は主観的な幸福度と強い相関関係があることが知られている(次ページ図)。先ほどの文章はより正確には「経済成長とは、時間を通じて実質GDPが増えることである」ということになる。

【図】幸福度と実質 GDP の相関関係(2020 年)



(注)縦軸は 0 ~ 10 の範囲。数値が高いほど満足度も高い。円の大きさは人口を示す

さて、「価格」の役割を考えるため、もう少し複雑な経済を見てみよう。2つの財、「普通のリンゴ」と「甘いリンゴ」があるとする。普通のリンゴの価格はつねに 50 円、甘いリンゴの価格はつねに 80 円だとして、最初の年は普通のリンゴも甘いリンゴも 10 個、次の年は普通のリンゴが 9 個で甘いリンゴが 11 個作られたとしよう。すると、「価格 × 数量」の和は、最初の年は「 $50 \times 10 + 80 \times 10$ 」、次の年は「 $50 \times 9 + 80 \times 11$ 」、となる。

ここで価格がそれぞれの財の数量に掛けるウェートになっていることに注意してほしい。大切なのは、価格が高い財ほどウェートが高い、ということである。

なぜ価格が高い財ほどウェートを高くするのだろうか。この計算の背景には、「価格は消費者の主観的な好みの強さを反映する」というミクロ経済学の重要な結果がある。普通のリンゴと甘いリンゴの両方を買っている人がいたら、その人の好みの相対的な強さ(正確には、次に買う 1 個のリンゴへの好みの強さ)を 50 : 80 という比率で表すことができる、と考えるのである。

例に戻ろう。この例ではそれぞれの財の価格が変化していないため、名目 GDP と実質 GDP は同じである。数字を比べてみると、「 $50 \times 10 + 80 \times 10$ 」よりも「 $50 \times 9 + 80 \times 11$ 」のほうが大きい、つまり、この経済は成長している、と結論づけることができる。ここでは、最初の年から次の年にかけて、トータルのリンゴの数は 20 個で変わらないにもかかわらず経済は成長している。^(A)

一般化すると、数量は変わらなくても、つくるものの中身を「消費者が高い価格を払ってもよいと思っている財」にシフトさせれば、経済成長を達成できる。

「経済成長は悪」と議論する人には、経済成長を達成する手段は数量を増やすことのみ、と誤解し

ている人が多いように思う。しかし先進国では、経済成長のエンジンは数量ではなく、新しいアイデアや技術により財・サービスがより質の高いものになっていくことである。例えば医療分野での成長には、薬をより多く造ることよりもむしろ、人々がより高い価格を払ってもいいと考える新たな治療法や新薬の創造のほうが重要である。

「よりおいしい料理」「よりよいデザインの服」「より感動を与える絵画」などは、同じ材料からより高価格で売れる財をつくることができる例である。「成長政策」を考える際には、この側面を忘れないでほしい。

また、環境や資源の問題は重要な政策課題である。マクロ経済学者としては、その議論の際、財の質を考えると「環境に負荷がかからない経済成長」も可能であることを覚えていてほしいと思う。

(出典 向山敏彦「経済成長とは何か マクロ経済学者の考え方」、週刊東洋経済、2023年1月21日、一部改変)

※【図】の出所：Sustainable Development Solutions Network「World Happiness Report 2022」(2022)

(1) 筆者は「マクロ経済学でいう経済成長」を、どのように説明しているか。本文に即して75字以内でまとめなさい。

(2) 筆者は「各国の実質GDP(正確には「1人当たりの実質GDP」)は主観的な幸福度と強い相関関係があることが知られている」と述べているが、【図】の横軸に施された工夫を100字以内で述べなさい。

(3) 下線部(A)について、なぜ筆者は「最初の年から次の年にかけて、トータルのリンゴの数は20個で変わらないにもかかわらず経済は成長している」と述べているのか。その理由を本文に即して350字以内で説明しなさい。

(4) 日本において経済成長を達成するには、どのような手段が必要か。本文における筆者の提言をふまえて、あなたの考えを250字内で論じなさい。